

論文要旨

本研究は、占いや血液性格判断の機能に関する研究である。上瀬ら（1991）や永田（2000）や李（2011）などの先行研究を踏まえて、本研究を行った。

『大辞泉』（小学館）によれば、占いとは「人の運勢、物事の吉凶、将来の成り行きを判断・予言すること」である。具体的には星占いやタロットなどがある。また、血液型性格判断とは、血液型によって、人間の性格や他人との相性を判断することである。占いは科学的に証拠がないが、多くの人々はそれを信じてしまう、あるいは、信じなくても、結果が気になる。これは、占いは当たらないにも関わらず、占い情報の曖昧さ、バーナム効果、確証バイアス、自己充足予言があるために、当たるように感じられるために、それを信じている人も多いからである。

最初に最近よく売れている 2 冊の本を選んで、その内容を分析した。

次に、1980 年前後に発行された有名な血液型人間学研究者が書いた本を分析した。

本の分析の結果を踏まえると、仕事についていない人や、恋愛などに悩みがある人は、血液型性格判断などに興味があるといえる。調査は公立大学の大学生 86 名（男子 26 名、女子 60 名）を対象して質問紙を答えてもらった。アイデンティティ尺度測定と質問紙調査を行った。所属・性別・年齢を記入させた。下山（1992）が作ったアイデンティティ尺度をそのまま使って、アイデンティティを測定した。この尺度は「アイデンティティの確立」尺度と「アイデン

ティティの基礎」尺度から構成され、「アイデンティティの基礎」尺度は 10 項目あり、すべては逆転項目から構成されている。「アイデンティティの確立」尺度も 10 項目あり、「アイデンティティの基礎」尺度と合わせて、全部で 20 項目ある

血液型性格判断への興味について、項目を「職業」と「恋愛」に分け、さらに、この 2 つの項目を 6 つのサブ項目に分けた。「職業」について、「天職・適職」、「上司（先輩）との付き合い方」、「部下（後輩）との付き合い方」という 3 つのサブ項目に分けた。「恋愛」について、「相性」、「相手との付き合い方」、「自分の性格」という 3 つのサブ項目に分けた。（表 1）回答は 5 件法で求め、各項目への回答に対して、1～5 点を、「非常に知りたい（5 点）」～「全く知りたくない（1 点）」のように与える

占いや血液型性格判断の機能について、本の分析の結果を見ると、昔の本の中では、「職業」についての文章はなかった。これは、当時年功序列や世襲制度があったため、目上の人に対しての態度や付き合い方は先輩や親から教えて貰えるのだ。しかし、近年の本では、「職業」についての文章は多くなっている。これは、今現在、年功序列と世襲制度と成果主義（実力主義）が三足鼎立であり、従って今から就職する人にとって、必ずしも入った会社の上司は年上の人とは限らない。この場合は、年下の上司と年上の部下とはうまく付き合えるのかが悩みになる。血液型性格判断は有効な手がかりになったと思われる。また、近年の本の中で、「自分」についての文章は昔の本より多かった。これは、現在の人たちは、他人より、自分をよく知りたいからであると思われる。特に、今現在流行っている就職試験では、「自己分析」や「適性試験」などがある。いずれしても、

自分自身に対して、どのくらい知っているのかを判断する試験である。人間は自分の良いところしか見ない短所がある。こういう試験をすれば、より客観的にあるいは自分が知らなかった自分を知ることができると思われる。「恋愛」についても、人の心は読めないため、聞いても答えてくれないときもあるので、この場合、血液型性格判断や占いなどを使って、少しでも相手の本音を知りたいと思って本を開く。これで、安心感が得られると思われる。

以上で、占いや血液型性格判断の機能について説明した。人間関係は複雑である。自己開示できる人とできない人がいるし、付き合いやすい人と付き合いにくい人もいる。しかし、人間は向上心がある。自分の弱点を知り、それを治そうとしている。だから、周りあるいは仲良くしたい人とうまく付き合えるために、様々な手段を利用している。自己開示できる人に対して、普通にしゃべりだしたら、いろいろなことを教えてくれるかもしれないが、自己開示でき人に対して、本人に聞いても本音が出ないときが多いから、他のところから情報を収集して、判断するしかない。そのため、占いや血液型性格判断などは効率的によい手掛かりになると考えられる。